

たましいは生きている(小川未明)

昔の人は、月日を流れる水にたとえましたが、まことに、ひとときもとどまることなく、いづくへか去ってしまうものです。そして、その間に人々は、喜んだり、悲しんだりするが、しんけんなのは、そのときだけであって、やがて、そのことも忘れてしまいます。

この話も、後になれば、迷信としか、考えられなくなる 때가あるでしょう。

わたしの兄は、音楽が好きで、自分でもハーモニカを吹きました。海辺へいっては砂の上へ腰をおろして、緑色のあわ立ちかえる海原をながめながら、心ゆくまで鳴らしたものでした。無心で吹くこともあったし、また、はてしない遠くをあげたこともあったでしょう。それは、夕日が花のごとく、美しくもえるときばかりではありません。灰色の雲が、ものすごく低く飛び、あらしの叫ぶ日もありました。

「正ちゃん、この海の場合は、ベートーベンのオーケストラに、まさるともおとらないよ。人間が、いくらまねようたつて、自然の音楽には、かなわないからね。」と、兄は、いいました。

戦争が、だんだん大きくなって、ついに、兄のところへも召集令がきました。わたしは、その日を忘れることができません。いままで、たのしかった、家の中は、たちまち笑い

が消えてしまつて、兄は、自分の本箱や、机のひきだしを、片づけはじめました。

「いけば、いつ帰るかわからないから、ハーモニカを正ちゃんに、あずかってもらうかな。」

こうきくと、わたしは、兄の気持ちを考えて、しぜんと涙がわきました。

「にいさんが、帰るまで、なんでも、そのままにしておくよ。」
「いや、もっと戦争が、はげしくなれば、この家だって、どうなるかしれんものね。」

兄は、無事で帰れたなら、また勉強をはじめるともりだったのでしょう。英語の辞書も、いっしよに渡しました。

しかし、兄は、それぎり帰ってきませんでした。兄の船は、南方へいったといううわさでしたが、出発後、なんのたよりもなかったのです。

わたしは、海辺に立つて、はるかな水平線をながめて、ハーモニカを吹きました。入り日の前の空に、さんらんとして、金色のししのたてがみのような雲や、また、まっ赤な花のような雲が、絵模様のように、飛ぶことがありました。兄は、こんなようなたそがれが、大好きであつたと思うと、いまごろ、どこかの島で、この空を見てるのなからうかと、ひとりで、目の中のくもることがありました。わたしは、せめて、この真心の、兄に通ずるようにと、ハーモニカを吹いたのです。

また、あらしの日にも、兄のしたごとく、海辺へ出て、鳴らしました。しかし、兄のハーモニカが、ここにありながら、それを愛する兄の、いないということは、考えるとさびしい

かぎりでした。

その翌年の夏には、公報こそ入らなかったけれど、兄の戦死は、ほぼ確実なものとなりました。

ある日、わたしは、波打ちぎわで、清ちゃんと遊んでいました。

「波は、生きているよ。」と、清ちゃんが、いったので、わたしは、

「生きているって、たましいがあるというの。」と、ききかえしました。

「うそと思うなら、石を投げてごらん。怒って、大きくなるから。」と、清ちゃんは、ふしぎなことをいうのです。

わたしは、石をひろって投げました。つづいて、清ちゃんが、なげました。ふたりのすることを、せせら笑って見ていた、白い波が、だんだん高く頭をもたげて、急にふたりの足もとをおそいました。

「ほら、おこった!」と、清ちゃんが、叫びました。

わたしは、むちゅうになって、石をひろっては、できるだけ沖へ近づいて投げると、もくら、もくらと、海はふくれ上がり、大波が、わたしの足をさらおうと、やってきたので、あわてて逃げました。そのとき、砂の上へおいたハーモニカを持っていてしまいました。

わたしは、波が、またハーモニカを返してくれはしまいかと、しばらく立って、待っていたが、それは、ついにむだでした。

月の明るい晩でした。わたしは、窓に腰をかけて、どこかで鳴く虫の、かすかな声をきいていました。秋の近づくのを感じ

じたのでした。すると、たちまち、ハーモニカの音がしたのです。

「あれは、だれがふいているのだろう。」と、こんどは、そのほうへ気をとられました。吹いている人は、歩いているのか、その音は、近くなったり、遠くなったりしました。

「にいさんじゃないか。」と、わたしは、立ち上がりました。あまり、しらべが、よくにいていたからです。外へ出てみようとするうちに、ハーモニカの音は、やんでしまいました。

まだ、そのうたがいの解けぬ、二、三日後のことです。わたしは、赤く夕日が、海へ沈むのをながめていました。すると、うしろの砂山のあたりで、ハーモニカの音がしました。その吹き方が、兄そっくりなので、わたしは、はっとして、このときばかりは、全身があつくなりました。

「だれだか、見てやろう。」

ただ、むやみとそのほうへ、足にまかせて、かけ出したが、いつしか、音も消えれば、さっきまで、ちらほらしていた、人影まで、どこへやら去って、見えなくなったのです。

わたしは、家に帰って、このことを母に話しました。

「それは、気のせいです。あまりおまえが、にいさんと思うから。」と、母は、いいました。

しかし、わたしは、気のせいだとは、信じられませんでした。けれど、それ以上いい張ることは、できませんでした。ところが、なんとおどろくことには、こんどはうず巻く波の中から、兄の吹く、ハーモニカのしらべがきこえたのです。わたしは、さっそく、清ちゃんを呼んできました。清ちゃんは、いつになく、まじめくさって、耳をすましました。

「きっと、正ちゃん（しょうちゃん）のなくした、ハーモニカ（さかな）をお魚（こい）が、小さな口（くち）で吹（ふ）いているんじゃないか。」といいました。

その後も、わたしは、ひとりなぎさに立（た）って、ぼんやりと海（うみ）をながめることがありました。あるとき、知らない男（おとこ）の人が、わたしのそばに立（た）って、じっと沖（おき）の方（ほう）をながめていました。顔（かお）の色（いろ）は、日にやけて黒（くろ）く、その目（め）は、とび出（で）ているようで、いくらか、こわい気（き）がしました。お寺（てら）へいくと、よくこんな形（かたち）をした、木像（もぞう）の仏（ほとけ）さまがあるのを、わたしは思（おも）い出（だ）しました。こちらが、やさしくものをいったら、怒（おこ）りはしないだろうと、考（かん）えたので、

「おじさんは、なにを見（み）ているの。」と、ききました。すると、怒（おこ）るどころか、うちとけて、わたしを見（み）ながら、

「あちらの島（しま）に、まだ残（のこ）っている、戦友（せんゆう）のことを思（おも）っていたんだよ。」と、その人（ひと）は、答（こた）えました。

「まだ、かえらないの。」

「土（つち）の中（なか）で眠（ねむ）って、永（えい）久（きゅう）に帰（かえ）らないのさ。」

「おじさんは、いつ復員（ふくえい）したの。」

わたしは、すぐ（すみ）に兄（あに）のことを思（おも）い出（だ）さずにいられませんでした。

「まだ、一月（ひとつき）ばかりにしかない。いくら苦（くる）しんでも、こうして、帰（かえ）られたものは、しあわせだが、いつまでたっても、もどらない戦友（せんゆう）はかわいそうだ。」

これをきくと、わたしは、情（なさ）け深（ひか）い人（ひと）だと思（おも）ったから、

「おじさん、ぼくの兄（あに）も戦死（せんし）したんです。」といいました。

「やはり、そうか。」と、急（きゅう）に暗（くら）い顔（かお）になつて、うなずきました。いつか、ふたりは、ならび合（あ）って、砂（すな）の上に腰（こし）をおろ

し、海（うみ）の方（ほう）を向（む）いていました。

「ぼく、いつも、ここに立（た）って、にいさんを思（おも）うんですよ。」と、わたしが、いうと、その人（ひと）は、目（め）を足（あし）もとへ落（お）として、やはりうなずくばかりでした。

「人間（にんげん）は死（し）んでも、霊魂（れいこん）は、生（い）きているのではない？」と、わたしは、ふしぎなハーモニカの音（ね）から、おじさんに、こうたずねたのでした。あるいは、戦地（せんち）にあつて、それを経験（けいけん）したとも、かぎらないと思（おも）ったからです。おじさんは、しばらく、なにか考（かん）えているようなようすだったが、やがて、顔（かお）を上（あ）げると、

「それについて、ふしぎなことがある。」といいました。

「ふしぎなことって、どんなこと。」

「ゆうれいとでも、いうんだろな。」

「えっ。」と、わたしは、びっくりしました。

このとき、つめたい風（かぜ）が、海（うみ）の上（うへ）から、さっと陸（りく）へ向（む）かつて、走（はし）ったように感（かん）じました。

おじさんは、口（くち）を開（ひら）きました。

「前線（ぜんせん）へ、伝令（でんれい）に立（た）った兵士（へいし）が、帰（かえ）りの山（やま）の中（なか）で道（みち）を迷（まよ）ってしまった。困（こま）っている、ふいにくつ音（おと）がしたので、まさしく、敵（てき）に出（で）会（あ）ったと、身（み）がまえすると、思（おも）いがけない、親友（しんゆう）だったの、二度（ど）びっくりした。あまりおそいので、こんなことではないかと迎（むか）えにきたよ。さあ、暗（くら）くならぬうち、早（はや）くいこうと、戦友（せんゆう）は、先（さき）に立（た）って、よくこんな道（みち）を知（し）っているなと思（おも）うようなところを歩（ある）いた。だが、かれはこのあいだの戦争（せんそう）で死（し）んだのではなかったかと気がついたので、休（やす）んだら聞（き）こうと思（おも）っているうち、その姿（すがた）を見（み）失（うしな）ってしまった。そ

れと同時に、ふもとの方で、軍馬のいななきをきいたというのだ。」と、おじさんは、話しました。

「靈魂が、親友を救ったのですね。」と、わたしは、その話に感動したのでした。そして、わたしは、兄の吹く、ハーモニカの音が、このごろ、たびたびきこえると、いいますと、「きつと、きみのにいはさんは、家のことを思っているのだらう。」と、おじさんは、答えました。

「そうしたら、どうすればいいの。」と、わたしは、ききました。

「せいぜい、にいはさんの好きなことをしてあげて、靈魂をなぐさめるんだね。」と、おじさんは、いいました。

そのことを、わたしに教えてくれた、おじさんは、どうしたのか、その後ふたたび見ることができませんでした。

わたしの兄は、なにより平和を愛しました。だから、音楽がすきでした。わたしは、父にねがって、兄のもっていたのと、同じハーモニカを買ってもらいました。そして、それを吹くときには、かならず、兄の気持ちになろうとしました。

わたしの兄は、自然を愛したし、また、だれに対してもしんせつで、なにをするにも、やさしみの心をもっていました。

わたしは、海岸へいくと、まず、兄のしたごとく、砂の上へ腰をおろしました。そして、ハーモニカを吹きました。このとき、空を飛ぶ雲、打ちよせる波、しきりと顔へあたる風、ともどもに、申し合わせたごとくたたずんで、

「ききおぼえのある、なつかしい音だ。」と、いつているようにした。

わたしは、ますます、兄の目、兄の心をもってきました。

すると、かれらは、

「あれを吹くのは、弟か、兄そっくりじゃないか。また、この浜辺へも、昔のような平和が、やってきたな。」と、ささやき合っているのです。

わたしの真心で、兄のたましいも、はじめて、なぐさめられたものか、ふしぎなハーモニカの音も、それ以来しなくなったのであります。